

ダンス技能とリトミックの関係について

(第 3 報)

—— リトミックの効用について ——

西 谷 恰 子
長 尾 洋 子
鎌 尾 紘 子

ま え が き

ダンスは、人間の思想や感情を律動的な動作で表現する芸術であり、ゆたかな、そして自由な動きの詩であるということは、第1報にのべた通りである。よりよい作品を作り、より美しく踊るためには、もちろん、構成、空間形成、リズム、動きなどの要素が、相俟ってできるのであるが、この大切な要素のうちのリズムを取り上げて、第1報、第2報に引き続き、リズム感覚の分析を試みようとするものである。


ダンスの創作の手順としては、創作欲求から主題を決め、それによって動きのイメージを描き、構成を考え、その内容により動きのモチーフを作り、イメージを追って、動きを作る。そして後にその作品を、より効果的に表わすべく伴奏を工夫する、という順序であるが、段階的、計画的なリズム指導を行なわずに一足とびに前に述べたような指導にふみきるために、作品全体のリズムの流れが不自然であったり、滑稽になったり、作品としての価値あるものができない。そこで練習の過程において、リズムにあわせて動く練習や、曲にあわせて踊る練習をすることによって、正しいリズムの形成や、音楽の形成などを覚えながら身体でリズムを感じさせるように指導を試みた。しかし、学生全員に同一の曲を与えて創作の練習をさせると、第1報、第2報のように、共通した難しいリズムや、動けないリズム、間違えるリズムがあることに気づいた。そこで前回は引き続き、さらにその追求を続けてみたいと思う。

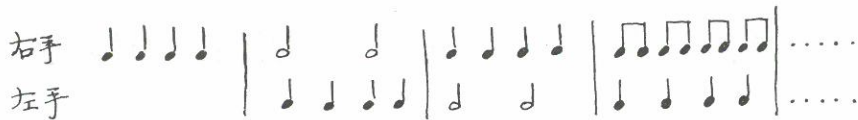
1. 目 的

このたびは、異なるリズムの組み合わせをすることにより、どのようなフレーズが反応困難か、また、メロディーがないという条件において、フレーズを与え、自由な動きで踊らせ、フレーズ別にどのような動きを多く用いるか、そして、困難で動きにくいパターンはどれかを追求し、また、リズム反応テストの結果と比較検討することにより、ダンス指導においてのリズム指導に役立たせようとするものである。

2. 方 法

- (1) 期 間 昭和40年6月～41年2月
- (2) 対 象 本学体育科学生20名
- (3) 指導過程 第1報のリズム反応訓練に加えて、次のものを行なった。

- ① 両手にバチを持ち  等のリズムを1小節単位で、まず与えられたリズムを右手のバチでたたき、リズムが変わったら、今までのリズムを左手のバチに移し、新しいリズムを右手のバチでたたく。



② ①の両手で行なった反応を、手拍子（手でリズムをたたく）と、ステップの組み合わせに変えて行なう。



③ ①の方法で読符（視覚）によるもの

④ ②の方法で視覚によるもの

(4) テストの方法

a リズム反応テスト

1小節単位のリズムパターンを先に手拍子と足のリズムの方法（太鼓によるリズムを聞き、ただちに反応する）により行ない、期間を置いて、2小節単位のリズムパターンを、同様の方法で行なう。（ただし、いずれも1回のみ）

b リズム理解テスト

aに使用したと同じ2小節単位のリズムパターンをピアノによって与え、書き取らせる。



c リズム表現テスト



aに使用したと同じ2小節単位のリズムパターンを1回聞き、ただちに表現による反応を2回くり返して行なう。


3. 結果の処理と考察



第1表 (リズムパターン別テスト成功率集計表)





リズムパターン 番号	リズムパターン	2小節	1小節	表現	聴音	リズム パターン 番号	リズムパターン	2小節	1小節	表現	聴音
1		90	95	90	100	16		75	80	90	100
2		85	95	95	100	17		60	95	100	90
3		85	95	100	100	18		85	80	100	95
4		95	80	95	95	19		15	95	100	10
5		95	90	100	95	20		60	80	100	100
6		95	90	100	95	21		75	85	100	90
7		80	90	100	90	22		80	85	90	90
8		80	90	100	90	23		80	85	75	90
9		15	80	95	90	24		20	80	95	85
10		30	80	95	100	25		20	80	75	90
11		85	85	95	95	26		85	85	90	85
12		20	60	95	95	27		95	85	95	75
13		75	85	95	90	28		75	90	90	100
14		75	85	95	90	29		15	95	75	95
15		15	60	90	95	30		65	90	95	90



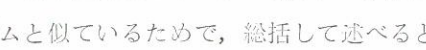
2小節単位リズム反応テスト、および1小節単位リズム反応テスト、表現反応テスト、聴き取りテストの成功率を比較すると、第1表のようになる。同型のリズムを入れかえた場合の反応度を比較してみると、ほとんど差はないようであるが、次のリズムについては大きな差がみられた。③ $\frac{4}{4}$  は、85%であるのに対し、④ $\frac{4}{4}$ 

 は、15%である。これは、前者のリズムが、1小節目が容易な、ゆっくりとしたリズムであるため、2小節目のシンコーペーションを判断する余裕が生じたが、後者は、いきなり短い音符のあとシンコーペーションになるため、ここでつまづき、あとまで、できなかつたと思われる。⑪ $\frac{4}{4}$  は、85%、

⑫ $\frac{4}{4}$  は、20%については、前者のリズムが2拍目の余裕のあと、1拍あって3連符になっているのに対し、後者は、符点のあとの8分音符で緊張したのに続いて、3連符へのより大きな緊張が続いたため、困難であったのであろう。

⑬ $\frac{3}{4}$  は、85%、⑭ $\frac{3}{4}$  は、15%については、後者の8分音符の連続の反応に出遅れたため、失敗している。次に、同型のリズムを4拍子と3拍子にした場合の反応状態を比較してみると、両方共にできたリズム、また、かなり差のみられるリズム、共に困難なリズムがあった。差のみられるリズムを上げると、

⑮ $\frac{4}{4}$  は、20%、⑯ $\frac{3}{4}$  は、95%については、4拍子の方で、できなかつた3連符、符点4分音符が、3拍子では容易となったのは、1拍目に4分音符ができたため、8分音符のあとの3連符より3等分しやすくなり、符点4分音符も、後者は、3拍目が4分音符という安心感から、容易になったものとみられる。⑰ $\frac{4}{4}$  は、15% ⑳ $\frac{3}{4}$  は、65%については、3拍子の方も、あまり良い出来ではないが、シンコーペーションの型が、1回のみであったため、4拍子の時よりは容易となった。

⑱ $\frac{4}{4}$  は、75%、㉑ $\frac{3}{4}$  は、15%については、両方共シンコーペーションであるのに、このような差の生じたことは、4拍子の方は、4分音符の後の8分音符が反応をする場合、手が胸にいった後である（この場合が、いちばん拍子が感じやすい）のに対して、3拍子の方は、手が上にいった後であるため、後者の方が困難となった。4拍子、3拍子共にできていないものについては、全体的に困難なリズムと似ているため、総括して述べると、⑰ $\frac{4}{4}$ 

④ $\frac{4}{4}$  ⑫ $\frac{4}{4}$ 

⑩ $\frac{4}{4}$  ⑲ $\frac{3}{4}$  等のリズムパターンで

① シンコーペーションが、2回連続して含まれているもの

②  と  の組み合わせられたもの

③ 強拍が短いリズムのもの

④ 短いリズムの続いたもの

が、反応困難となっている。

次に、2小節単位のリズムと、1小節単位のリズムの反応状態を比較してみると、後者は、成功率の最低か、60%と、全体的にも、前者のそれよりは、良好である。これは、リズムの単位が短かいために、記憶が容易であったことと、反応訓練の際、1小節単位のものを多く用いたことに、原因しているようである。我々が、テスト以前に、異なった性質のリズムを組み合わせて、2小節にした場合、1小節のみの反応より、容易になるパターンがあるのではないかと、いう予想は、全くはずれ、1小節単位で困難なものは、2小節にしても、やはり、それ以上に困難であったようである。

次に、リズムの聴き取りと、リトミック反応との関係を比較してみると、聴き取りの方は、すべてにわたって好成績である。これは、ピアノによってリズムを与え、ゆっくり書き取らせたためと思われる。しかし、個人的に両者の関係を調べてみると、ほとんどの者は、両者の相関度がみられるが、なかに、聴き取りは、非常に良好であるのに、リトミックでは下位を示している者が、1人いる。これは、ゆっくり時間を与えれば知的に理解はできるが、即時に身体でリズムに反応することができないのであろう。ただし、表現の反応においては、良い動きを示している。また反対に、聴き取りは下位であるのに、リトミック反応では良好なものが、3人見受けられる。これは、リズム符が頭に浮かぶより先に、身体で感じて動けるのであろう。リトミックのあり方としては、どちらかといえば、後者の方が望ましく、進歩があるように思われるが、今後の指導に一考を要する問題点である。

第 2 表 (リズムパターン別) 動きの種類集計表

リズムパターン 番号	リズムパターン	動きの種類	リズムパターン 番号	リズムパターン	動きの種類
1	$\frac{4}{4}$ d d	左右へ同じホズを続け行く(後者のパターン)ランニングホズと終る。	16	$\frac{3}{4}$ d	ホズをして、1歩のみ出し、ランニングパターンをしてホズと終る。
2	$\frac{4}{4}$	両手を同じようにアップダウンしながら歩く(ウォーキング)を、ランニングホズと終る(前例の前例)としてホズをす。(前例の前例)ランニングとジャンプを交互に行なう。体音運動す。	17	$\frac{3}{4}$	ウォーキング2歩と、ランニングで前進し、ホズと終る。
3	$\frac{4}{4}$ d	2歩出で、セルビエーションとして、ホズと終る。前後は左右へ解舞す。	18	$\frac{3}{4}$ d	スリーステップパターンをしてホズをとる。
4	$\frac{4}{4}$	左右同時にホズを続け、ウォーキングは2回くり返す。	19	$\frac{3}{4}$	ランニングで前進し、パランスホズと終る。2歩出でホズとする。
5	$\frac{4}{4}$ d	ウォーキングにはホズを左右へ同時に進みながら、セルビエーションをしてホズと終る。	20	$\frac{3}{4}$ d	ホズで待ち、ウォーキングで前進し、ウォーキングを2歩待ちながら前進する。
6	$\frac{4}{4}$	ステップを2回繰り返す。ウォーキングを2回繰り返す。	21	$\frac{3}{4}$	ウォーキングで前進し、セルビエーションをしてホズをとる。変えたり。
7	$\frac{4}{4}$	ステップを2回繰り返す。ウォーキングを2回繰り返す。	22	$\frac{3}{4}$	ウォーキングで待ち、セルビエーションをしてホズと終る。
8	$\frac{4}{4}$ d	ステップを2回繰り返す。ウォーキングを2回繰り返す。	23	$\frac{3}{4}$	ステップを2回繰り返す。ウォーキングを2回繰り返す。
9	$\frac{4}{4}$ d	ウォーキングで待ち、セルビエーションをしてホズと終る。	24	$\frac{3}{4}$ d	ウォーキング2歩出で、ウォーキングをしてホズをとる。
10	$\frac{4}{4}$	ホズを2回繰り返す。ウォーキングを2回繰り返す。	25	$\frac{3}{4}$	ホズを2回繰り返す。ウォーキングを2回繰り返す。
11	$\frac{4}{4}$ d	ホズを2回繰り返す。ウォーキングを2回繰り返す。	26	$\frac{3}{4}$	ウォーキングをして、ウォーキングをしてホズをとる。
12	$\frac{4}{4}$	ホズをしてウォーキングを2回繰り返す。ウォーキングを2回繰り返す。	27	$\frac{3}{4}$	両足踏み分け、ジャンプをしてウォーキングで前進し、セルビエーションをしてホズをとる。
13	$\frac{4}{4}$	ランニングで前進し、左右へパランスホズを2回繰り返す。	28	$\frac{3}{4}$	軽、前後、ランニングで、ジャンプを2回繰り返す。
14	$\frac{4}{4}$	パランスホズを2回繰り返す。ウォーキングを2回繰り返す。	29	$\frac{3}{4}$	ウォーキング2歩出で、ウォーキングをしてホズをとる。
15	$\frac{4}{4}$ d	ウォーキングで待ち、セルビエーションをしてホズと終る。	30	$\frac{3}{4}$ d	ホズをして、ウォーキングをしてホズと終る。

リズム反応テストについては、以上のような結果が得られたが、それぞれのリズムパターンに対する表現の成功率は、第1表に、また、最も多く使われた動きについては、第2表に示したとおりである。

まず、表現困難であったリズムパターンを上げてみると、 $\textcircled{23} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$

$\textcircled{25} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ $\textcircled{29} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ で、いずれも3拍子で、符点音符の含まれているもの、シンコーペーションの含まれているものである。この3つのリズムパターンのうち、 $\textcircled{23} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ は、75%の成功率であるが、これと同型のリズムで、4拍子にすると、全員が正しく表現できていた。3拍子では、連続した符点音符の前が、4分音符であるのに対して、4拍子では、長い2分音符であるため、余裕をもって表現できたのであろう。このリズムの1小節目と2小節目を逆にしたのが、

$\textcircled{22} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ であり、これも90%の者は正しく表現でき、また、4拍子にすると、全員正しく表現できていた。連続した符点8分音符の前に、長い音符があると、動きを考える余裕があるため、正しく表現できるが、短い音符であると、即時に動きが浮かばず、表現できなかったのであろう。

$\textcircled{25} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ のリズムについても同じことが言える。前と後の小節目を逆にした $\textcircled{24} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ は、比較的良くできていた。これらのリズムを4拍子にした $\textcircled{9} \frac{4}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ と $\textcircled{10} \frac{4}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ では、

95%であるが、どちらも符点8分音符の前または、後に4分音符が来ているため、2分音符の時のように、余裕がなく、あわてたためできなかったのであろう。 $\textcircled{29} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ のリズムは、75%の成功率であったが、この場合は、シンコーペーションが、いきなり1小節目にあって、2小節目のリズムは全員正しく表現できていたのに、1小節目は、全く手がつけられないといった状態であった。前後の小節目を逆にしたのが、

$\textcircled{28} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ であるが、これは、シンコーペーションが、2小節目にあるために、1小節目で考える余裕があり、割合良く理解できていた。これらと同型のリズムで4拍子にかえたのが、

$\textcircled{13} \frac{4}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ と $\textcircled{14} \frac{4}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ であるが、どちらも95%で比較的良くできていた。 $\textcircled{15} \frac{4}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ は、シンコーペーションが、2回続いているため、1小節目だけ動いて、2小節目は動けなかった者がいて、成功率は90%であった。これを3拍子にかえた、

$\textcircled{30} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ では、95%の者ができ、割合成績が良かった。これは1小節に長い音符があるため、ポーズをとって待っている間に、考えておいて、シンコーペーションが連続しているにもかかわらず、うまく動けたものであろう。その他、比較的表现できなかったリズムパターンとしては、

$\textcircled{1} \frac{4}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ $\textcircled{16} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ $\textcircled{26} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ であるが、前2つのリズムは、それぞれ4拍子系、3拍子系の最初のリズムであったため、慣れていなかったものと思われる。

$\textcircled{28} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ は、3連符が含まれているリズムであるが、 $\textcircled{27} \frac{3}{4} \text{ J. } \text{ ♩ } | \text{ ♩ } \text{ ♩ } |$ と比べると、どちらも3連符のところは良くできていたが、前者は、1小節が符点4分音符に続いて、8分音符で終わっているため、2小節目に続くとき、不安定な感じを受け、符点4分音符と8分音符の間が、待

ちきれないでいる者が多かった。後者は、4分音符で終わっているため、安定感があって、前者よりも良くできていた。以上、表現によるリズム反応テストにおいて、表現困難であったリズムについて、総括して述べると



① ♩ と ♪ の組み合わせられたもの

② シンコーペーションが、2回連続して含まれているもの

これは、傾向としては、リズム反応テストと同じであるが、リズム反応においては、 $\frac{3}{4}$ 拍子も困難であったが、表現においては、 $\frac{3}{4}$ 拍子のリズムばかりであった。また、リズム反応テストにおいては、8分音符と3連符の続いたもの、および、強拍が短いリズムのものが、反応困難であったが、表現においては、両者とも比較的容易に理解できていた。

次に、それぞれのリズムパターンに対して、どのような動きが使われたかを集計してみたが、被験者は、大体同じような動きが多く、これといって変わった動きが見られなかったので、ここでは、代表的な動きを取り上げて第2表に示した。

1つ1つの音符に対しての動きを上げてみると、

♩ または、♪ などの長い音符の時は、ほとんど全員がポーズで待っている。

♪ は、ピルエットターンが多い。

♩ は、上体および腕を動かしながら歩く。

♪ の連続した時は、ランニングが多い。

♩ は、圧倒的にスキップが多い。

♩ および ♩ は、小走りかフォローが多い。

のようである。

また、今回は、2小節のリズムパターンを与えて、動きの種類や、動きの流れに、1小節のみのリズムパターンよりは、変化があるものと期待していたのであるが、前回の第2報の結果とあまり大差がなかった。しかし、リズム反応において、困難を示したリズムに、案外面白い動きが出たり、また、成功率も良かった。これは、動きによる表現の方は、リズム反応のように、手足同時の反応をするのではなく、身体の部分のいずれかによって、リズムの特徴を表わせばよく、自由な表現ができたためと思われる。

4拍子と3拍子のリズムが同型のものを、比較してみると、4拍子と3拍子のリズムの特徴的な動きが出てくることを予想したが、動きの種類は、4拍子のものも、3拍子のものも、ほとんど同じで、特徴が表われなかった。動きの種類に関して、以上2つの事が、総合して言えるのであるが、リズムのみを与えて、メロディーを与えなかったために、単調な、固定された動きしか浮かんでこず、同じような感じの動きになったのであろう。今後は、リズムのみならず、メロディーを加えて、ダンス技能とリトミックの関係についてさらに追求し、ダンス指導の一助としたいと思う。